

令和 2 年 7 月 15 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K06686

研究課題名(和文) 文化的景観としての都市・町並み・集落の価値評価及び保全手法に関する研究

研究課題名(英文) Research on evaluation and preservation methodology of historical city, town and village in view of cultural landscape

研究代表者

清水 重敦 (Shimizu, Shigeatsu)

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・教授

研究者番号：40321624

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：歴史的都市・町並み・集落の保存活用において、文化的景観の考え方を導入し、その価値評価と保存活用手法を統合する方法を検討すべく、全国の重要文化的景観及び重要伝統的建造物群保存地区の現地調査を行った。その結果、1. 文化的景観から都市を読み解くこと、すなわち自然・歴史・生活生業から読むこと及びスケールの異なる要素間の関係性を読み解くことの有用性、2. 価値評価と保存活用を一体として捉える方法、3. 都市における変化を必然ととらえ、都市のアイデンティティを保ちつつ変化するメカニズムに着目すること、の3点を新たな価値評価と保存活用の統合手法として提言した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

文化的景観の考え方は、日本国内でも世界においても農林水産業に関連する景観に対して投入されることが一般的であるが、特に日本では農林水産業関連景観だけでなく、都市・集落にかかわる文化的景観が保護対象としての射程に入れられている。しかしながらその複雑さゆえに、都市・集落の文化的景観の価値評価と保存計画立案は、決定的な方法論が打ち出せていない。本研究の成果として提示した方法論は、今後実地に適用しながらその方法が鍛えられていく必要があるものの、一定の道筋を示すものとして、今後の調査研究の指針となり得るだろう。また日本発の都市・集落の読解と保存の方法論として、世界に発信すべき成果とも言える。

研究成果の概要(英文)：This study conducted onsite research of Important cultural landscapes and Important preservation districts of groups of traditional buildings for finding new method for integrating their evaluation and preservation / utilization in view of cultural landscape. As the result, following three points are suggested: 1. reading cities from view of cultural landscape, i. e. reading from nature, history and livelihood or reading on relationship between elements with different scale, 2. Integrating evaluation and preservation / utilization, 3. regarding change in cities as inevitable phenomena and trying to find mechanism of the change.

研究分野：建築学

キーワード：文化的景観 伝統的建造物群保存地区 インテグリティ 変化のメカニズム 都市 町並み 集落

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

歴史的都市・町並み・集落の保全は、伝統的建造物群保存地区制度(以下「伝建制度」と略記)により牽引されてきたが、近年、文化財保護法における文化的景観の創設や歴史まちづくり法の公布により、手法が多様化し、活発な様相を呈しつつある。中でも文化的景観は、都市等をそのみで扱うのではなく、より広範なランドスケープの一構成要素として捉えるもので、都市等の保全に新たな考え方を導入するものといえる。また、文化的景観は文化財の一類型として制度化されるものでありながら、同時に一定の領域をとらえる際の一つの研究アプローチでもある。それは領域を自然条件、生態系、人々の生活・生業、あるいはそれらの歴史や変化といった諸方面から総合的に理解しようとするもので、新たな都市等の読解の可能性を秘めている。すなわち文化的景観は、都市等の保全手法と価値評価の両面に新風を吹き込むものといえる。

文化的景観の価値評価と保全に関する研究と実践は、平成16年の文化財保護法改正による制度成立以来、蓄積が進みつつあり、制度を活かした地域づくりにも魅力的な事例が出始めている。しかし多くは農林水産業に関連して形成された田畑、山林、海河などの広範な土地利用を対象とするものである。文化的景観には必ず居住域が含まれるので、その一部に町並みや集落を含んでおり、また都市域における文化的景観の事例もあるものの、その価値評価手法や保全手法は未だ試行錯誤の段階に留まっている。

一方、文化的景観におけるこうした都市等への視点は、近年の都市史研究における領域史(テリトリー)という視点と軌を一にするものでもある。都市を空間や場所として理解するだけでなく、風土との関連性やより広い領域において捉えようとするこの見方は、文化的景観の考え方や概ね一致しており、学術研究の面から考えても文化的景観による都市等の読解は都市分析の方法論の先端を行くものといっても過言ではない。

研究代表者は、ここ7年間ほど、文化的景観の中でも都市域を対象とするものの調査研究と保護の実践に集中的に取り組んできた。これらの調査や科学研究費補助金等による研究の経験により、都市域の文化的景観の価値評価と保存方法に対し、次のような問題を意識するようになった。都市等は文化的景観の観点により新たな読解が可能であり、その方法の開拓が必要であること、学術的な価値読解に留まらず、それを保全手法に結びつけることに大きな特徴があり、都市史研究一般とは一線を画すこと、しかしながら価値評価と保全手法とが必ずしも連続しておらず、両者を結びつける視点や方法の開拓が急務であること。

こうした現状と諸問題を踏まえ、既往の文化的景観調査の成果を全面的に見直して、現段階での見方を確立するとともに、研究代表者の既往の調査・研究成果を活かしてそれらを再読し、新たな視点、方法を開拓すべきであると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、重要文化的景観の各選定地に含まれる都市・町並み・集落、そして同様の事例である重要伝統的建造物群保存地区のうち伝統産業によって形成された町並み等を対象として、既往調査の整理と現地調査による再読を実施し、その価値評価と保全手法のあり方を検証していく。具体的には以下の諸点を明らかにする。

既選定の重要文化的景観における都市等の価値評価と保全手法の整理と総合化

以下の指標を軸に整理する。

A 風土性、B 持続性、C 諸要素の一体性、D ハードとソフトの関連性

新たな価値評価手法と保全手法の提言

応募者が手がけた既往の調査研究成果と の成果を総合し、新たな価値評価手法と保全手

法を、 の指標を軸にまとめ、提言する。

3．研究の方法

本研究の学術的特色として、 文化的景観というアプローチを通して見た都市等の読解方法と保全手法の提言、 価値評価とその保全を結びつけることによる学術研究と地域づくりの実践との融合、 都市・建築学に留まらない、学際的な視点を持った研究、 の3点が挙げられる。

全国の既選定の重要文化的景観につき、その中で都市・町並み・集落についての価値評価と保全手法を対象として、情報収集及び現地調査を行って既往の調査研究成果を整理、総合化するとともに、新たな価値評価と保全手法の提案を試みる。現地調査に当たっては、調査報告書や保存計画等の基礎情報の収集、分析をおこなった上で、可能な限り自治体担当者等の協力を得て実施する。調査成果を、価値評価、保全手法の両面からまとめて順次発表していく。

4．研究成果

研究の経過

初年度である2016年度は、文化的景観に関わる調査・研究状況を示す基礎的情報収集と、文化的景観の現地視察、そして中国における茶生産景観地の現地視察を実施した。基礎的情報収集として、基本文献や調査報告書の収集を行いつつ、大学院生とともに「文化的景観ゼミ」を開催し、個々の文化的景観の調査状況につき詳細な分析を行った。

現地視察としては、重要文化的景観選定地として一関本寺、長良川中流域における岐阜の文化的景観を、そして選定を目指した調査地として京都府南部の宇治茶の文化的景観、京都市右京区の中川の北山杉生産集落に赴き、現地調査を実施した。これらに加え、重要伝統的建造物群保存地区を文化的景観の視点から再読すべく、宮城県村田町の村田重伝建地区、金沢市東山ひがし等4地区を訪れ、主に生業の観点から町並みを再読することを試みた。これらの成果は、文化的景観については特に都市・町並み・集落と周辺土地利用の関係を読解するための方法論として、論考に取りまとめる作業を行い、伝建地区については保存制度では取り上げられにくい生業の観点から町並みを形成する建造物と都市の関係について、多くの示唆を得た。

中国調査では、浙江省、江蘇省の歴史的都市、寺院の現地視察を行うとともに、杭州西郊の龍井茶生産地を訪れ、茶農家への聞き取りにより最高級の龍井茶生産の内容を詳しく知ることができた。この成果は、京都府南部における宇治茶生産の様相との比較により、今後の文化的景観調査に活用されていくことになる。

2年目である2017年度は、文化的景観に関わる調査・研究状況を示す基礎的情報の収集と、文化的景観の現地調査を実施し、部分的な研究成果の発表を行った。基礎的情報収集として、大学院生とともに「文化的景観ゼミ」を開催し、基本文献や調査報告書の収集を行いつつ、個々の文化的景観の調査状況につき詳細な分析を行った。この成果をふまえて、重要文化的景観の選定地及び選定に向けた調査中の地の現地調査を実施した。今年度は、宇和島市遊子水荷浦、西予市狩浜、横手市浅舞の現地調査を実施した。風土、歴史、生業を一体として捉える視野から、既往の調査に検討を加える作業を行っている。また、同様の視点から伝統的建造物群保存地区を再読すべく、亀山市関宿、五箇荘金堂、西予市卯之町、内子町八日市・護国、塩尻市奈良井宿・木曾平沢、南木曾町妻籠宿を訪問し、それぞれ行政担当者や住民より価値、伝建制度の運用、地域づくりにつき詳しい説明を受け、分析を行った。

関連して、これまでの研究成果の一部を講演として報告する機会を得た。奈良文化財研究所が実施する文化財担当者研修において文化的景観の価値と保存計画の関係に関する講義を実施

した。また、文化的景観の活用の提案をすべく、ニューヨークのプラット・インスティテュートとの共同ワークショップを重要文化的景観「京都岡崎の文化的景観」において実施した。

3年目である2018年度は、未踏査であった国選定重要文化的景観または文化的景観選定計画地として、山形県大江町、長野市松代町を訪問し、文化的景観の価値付け、保存計画とその実践について、現地調査を行った。大江町では最上川との関連、生業との関連においてさらなる価値の掘り下げが可能であることを見出した。またこれまでの調査の継続として、葛飾区柴又、彦根市、京都府和束町等の宇治茶生産地の現地実測調査等を行い、文化的景観調査の方法論の随時の改良を試みている。

これらの調査、あるいは外国人研究者による招へい講演の企画、イタリア・トリノ工科大学と行っている合同ワークショップ等を行う中で、文化的景観の価値とその保全とを一体として捉える視点として、「変化のメカニズム」に注目することの意義に気が付くこととなった。以降、この観点から文化的景観を読解することを進めている。現在のところ、これらの成果及び「変化のメカニズム」に関する新たな視点を、全国町並みゼミ全国大会におけるシンポジウム、建築家とのシンポジウム「Aプロジェクト時間が呼び覚ます建築」、関西町並みゼミ発起大会における講演、アジア・ユネスコ文化遺産保存センターにおける文化遺産に関する国際研修等において世に問うことを重ねている。この考え方は近年の社会状況を反映した都市及び景観保全の現状によく合致することが確認された。

最終年度である2019年度は、未踏査であった国選定重要文化的景観または重要伝統的建造物群保存地区として、埼玉県川越市、群馬県桐生市、群馬県板倉町を訪問し、文化的景観の価値付け、保存計画とその実践について、現地調査を行った。川越市では全国町並みゼミ川越大会に参加し、文化的景観の考え方を町並み保存に適用する際の考え方として「インテグリティ」と「変化のメカニズム」に注目すべきことを論じるスピーチを行い、町並み保存関係者とのディスカッションを行った。桐生市では、重伝建選定後の保存活用に向け、伝統的織物業が造り出す敷地利用形態と建築形態の特徴についての読み解きを行い、行政担当者との協議を行った。板倉町では水郷地帯の文化的景観について詳しい説明を受け、文化的景観を生かした地域づくりの方法につき意見交換を行った。

また、関連する調査研究として、今年度より就任した文化庁文化財保護審議会第三専門調査会委員としての活動の一環として、滋賀県内の重要文化的景観選定地である高島市の海津・大崎、針江・霜降、高島の文化的景観にも訪問し、住民及び行政より文化的景観の価値と保存計画の実践について詳しい聞き取りを行った。加えて文化的景観に関わる受託研究として、高知県四万十市、京都府和束町の文化的景観調査、京都府による宇治茶の文化的景観調査を実施している。

研究の成果

歴史的都市、町並み、集落の価値評価について、様々な観点からの深化が見られることが本研究により確かめられた。しかし同時に、価値と保存計画あるいはその運用との間には、いまだ距離があることが確認された。

重要伝統的建造物群保存地区においては、近年、伝統産業により形成された町並みが多数重伝建に選定されており、文化的景観と対象が重なりつつある。それらの価値の読み解きを詳しく検証したところ、文化的景観としてのアプローチにおいて重視される生業と景観との関係、諸要素間の関係性、より広い範囲を対象にした構成要素の抽出とそれらが造り出すインテグリティといった諸観点からの読解が不十分であることが判明した。

一方、重要文化的景観ではいずれの選定地においても、自然、歴史、生活生業の各観点から幅広い価値の読み解きが行われていることが確認されたが、価値評価において諸要素をそれぞれに掘り下げることはなされているものの、それらがいかに文化的景観としてのまとまりを生んでいるのか、そしてその価値がいかに保存活用計画へと昇華されるのか、という点では不十分な地区が多いと言わざるを得ない。

本研究では、これらの問題点に対し、現地調査時の各担当者、住民との議論により、価値と保存活用計画をいかに連動させるかを検討してきた。その結果として以下の方法を得るに至った。

1. 都市・町並み・集落の価値評価において、以下の文化的景観の観点を導入すること。地形・地質、水系といった自然環境をベースに、ハードとソフトの分析を行うこと、都市・集落構造、各敷地、各建造物といったスケールの異なる要素間の関係性を読解すること、生活・生業がいかに景観として表出するか、という観点からモノの読み解きを行うこと。
2. 価値評価と保存活用計画を切り離すのではなく、一体として捉えること。重要文化的景観においては、価値評価と保存活用計画を切り離し、保存計画の構想無しに価値評価を行うケースが多く、それが両者の乖離の一つの原因となっていると推察された。重伝建においては保存計画の枠組みが明瞭であり、逆に価値評価の深度に一定の制限が掛かってしまっているものと考えられた。従って、保存計画の運用はあくまでもそれぞれの制度の枠組みの中で実施されるものではあるが、文化的景観と伝建制度の保存計画につき、相互の枠組みを相乗りさせた上で、価値評価のあり方を保存計画の構想を睨みながら検討することが必要である。
3. 文化的景観の考え方が都市・集落の保存計画に適用される際に、伝建地区の保存計画と幾分異なる面が生じるのが、変化のあり方の扱いである。都市・集落の保存計画においては、変化を緩めることで保存を実現するというよりは、変化していくことを必然と捉え、その変化をいかに町並みの価値へと結びつけるか、という見方に発想を転換していく必要があると考える。この場合、変化そのものにも町並みのアイデンティティを反映した面があると捉え、変化にもそれぞれの町並みにおけるメカニズムがあると捉えるべきと考える。

得られた成果の国内外における位置付けとインパクトと今後の展望

以上の方法により都市・町並み・集落の価値と保存活用計画を一体として捉えることで、新しい町並み保存が実現できるものとする。

文化的景観の考え方は、世界的には農林水産業に関連する景観に対して投入されることが一般的である。日本では2004年の文化財保護法の改正により文化財類型としての文化的景観が導入された当初より、農林水産業関連景観だけでなく、採掘・製造、流通・往来、居住に関わる文化的景観、すなわち都市・集落にかかわる文化的景観が保護対象としての射程に入れられていた。すなわち文化的景観の観点からの都市・集落の価値評価及び保存計画立案は、世界的に見ても新しいチャレンジといえることができる。しかしながら農林水産業関連の景観に比して格段に複雑な内容を含む都市・集落の文化的景観の価値評価と保存計画立案は、いずれも決定的な方法論が打ち出せないまま現在に至っている。

本研究の成果として提示した方法論は、今後具体的な都市・集落において実地に適用しながらその方法が鍛えられていく必要があるものの、一定の道筋を示すものとして、今後の調査研究の指針となり得るだろう。日本発の都市・集落の読解と保存の方法論として、世界に発信すべき成果とも言える。

今後はこの方法論を実地に適用し、文化的景観の観点からの都市・集落の保存活用を推進し、その有効性を確認するとともに都市・集落への視点の刷新を重ねて行きたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 清水重敦	4. 巻 73
2. 論文標題 保存と有機的進化の境界 文化的景観が都市・建築史学にもたらすもの	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 建築史学	6. 最初と最後の頁 34-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水重敦	4. 巻 1
2. 論文標題 錦帯橋におけるオーセンティシティ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 錦帯橋調査報告書	6. 最初と最後の頁 150-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 清水重敦	4. 巻 3
2. 論文標題 文化的景観としての家屋とは？ 岐阜町における伝統的家屋調査から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 文化的景観スタディーズ03 川と暮らしの距離感 四万十×岐阜	6. 最初と最後の頁 102-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森岡里奈、清水重敦
2. 発表標題 植木屋が培うランドスケープ
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 清水重敦
2. 発表標題 町並みの新たなフェーズとコミュニティの持続可能性
3. 学会等名 関西町並みゼミ大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----